入善町公共下水道事業入善浄化センター
建設工事に係る埋蔵文化財発掘調査

富山県入善町

入善浄化センター用地内じょうべのま東遺跡発掘調査報告

2002年3月

入善町教育委員会

上：調査地全景（南から）　下：SD01とSB01（南東から）

序

入善町は、富山県の北東部にあり、立山と後立山との間を一直線に流れる一級河川黒部川が形成した黒部川扇状地上に位置した農工一体の田園都市です。

じょうべのま東遺跡は、扇状地の扇端に位置し、平成８年度に浄化センター建設工事に伴う分布調査で確認された遺跡です。遺跡の西側には国指定史跡じょうべのま遺跡が隣接し、また北側１㎞には西蓮寺遺跡があり、これらの遺跡との関連が考えられます。

そこで、調査区の保存方法の検討を重ねてまいりましたが、地下での保存が困難と判断し、今回発掘調査を実施しました。

調査では、古代・中世から近世にかけてと推測される掘立柱建物をはじめ、様々な遺構・遺物が検出されており、郷土の歴史を知る上で、貴重な資料となりました。

本書が多くの方々の目にふれ、遺跡や歴史への関心・理解、ひいては郷土愛の育成につながっていけば幸いです。

なお、今回の調査にあたりご指導を賜りました富山県埋蔵文化財センター、朝日町教育委員会、(財) 朝日町文化･体育振興公社をはじめ、調査にご協力いただきました地元の方々や関係各位に心からお礼を申し上げます。

平成１４年３月

入善町教育委員会

教育長　米　島　秀　次

例　　言

1　本書は、富山県下新川郡入善町東五十里に所在するじょうべのま東遺跡の発掘調査報告書である。

2　調査は、入善町公共下水道事業入善浄化センター建設工事に伴う本調査である。

3　調査期間は、平成13（2001）年８月６日～同年10月３日（実働30日）、調査面積は1,462.5㎡である。

4　調査主体は、入善町教育委員会であるが、調査実施にあたり富山県埋蔵文化財センターから調査員の派遣を受けた。

5　調査事務局は、入善町教育委員会に置き、下水道課と連携をとりながら学芸員杉澤禎子が、主査伊林みつ子の協力のもと事務を担当し、生涯学習・スポーツ課長金森一洋が総括した。

6　発掘調査担当者は次のとおりである。

調査担当者	富山県埋蔵文化財センター調査課	係　長	橋本正春
		主　任	高梨清志
	入善町教育委員会生涯学習･スポーツ課	学芸員	杉澤禎子

7　本書の執筆・編集は、富山県埋蔵文化財センター職員の協力を得て、杉澤がこれにあたった。
なお、「第Ⅲ章　西蓮寺遺跡試掘調査報告」では、富山県埋蔵文化財センター文化財保護主事髙楯真実氏から玉稿を賜った。

8　土層及び遺物の色調は、小出正忠・竹原秀雄編著1967『新版標準土色帖』に準拠している。

9　出土遺物と調査に係る資料は、すべて入善町教育委員会が保管する。遺物の注記は、入善町じょうべのま東遺跡を示す「NJH」に調査年度・出土地点等を併記した。また、本書に掲載した遺物は、コンテナに入れ収蔵した。
（ex NJH X=10 Y=10 20010806）

10　グリッド測量及び航空写真撮影測量は、アジア航測株式会社が実施した。

11　出土遺物中、篦施文のある珠洲焼に関して、石川県立歴史博物館館長吉岡康暢氏に有益なご教示を得た。

12　出土遺物の写真撮影については、朝日町教育委員会、㈶朝日町文化･体育振興公社に機材外のご協力を得た。

13　調査にあたり、地元の東五十里地区の皆様に様々なご協力を得た。記して感謝の意を表する。

14　発掘作業員は、入善町シルバー人材センター（理事長　永井浩）に委託した。

15　ボランティア休暇制度を利用して、入善町役場職員２名が調査に参加した。

16　調査から本書の作成にいたるまで、下記の方々から有益なご教示を得た。
（以下、五十音順・敬称略）
安念幹倫・池野正男・越間瑞穂・岸本雅敏・斎藤隆・境洋子・匂坂友秋・関清・髙楯真実・水島康彦・宮田進一・吉田好逸

17　発掘調査参加者は下記のとおりである。
調査及び整理補助員　石田環奈
発掘作業員　幾田武・石塚経司・上田ふさ子・大井武義・大角あい子・金山昭作・小沢勇吉・小杉哲子・小林笑子・笹原サツエ・笹原初枝・沢田忠雄・杉田繁男・須沢厚子・須沢勇作・高畠玉枝・高見ミツエ・高森正男・田中一夫・田中民子・田中雅子・寺林清一・中川歳春・長川原貢・中塚和子・南保峯子・野沢けさ子・橋場重雄・浜田義男・広川秀雄・百石義松・坂東澄子・坂東久子・松田孝子・目沢敏男・森田勝美・米沢ユギ・米田正一
調査ボランティア　上田久志（海洋深層水課）・飯作美香（保健情報室）

目　　次

本文目次

第Ⅰ章　はじめに ……1
　1　調査に至る経緯 ……1
　2　遺跡の位置と環境 ……1
第Ⅱ章　調査の概要 ……5
　1　調査の方法 ……5
　2　調査の経過 ……5
　3　基本層序 ……9
　4　遺構 ……9
　5　遺物 ……11
　　(1)　古代・中世 ……11
　　(2)　近世以降 ……11
　6　まとめ ……14
　　参考文献 ……24
第Ⅲ章　西蓮寺遺跡試掘調査報告 ……25
　　報告書抄録 ……26

表　目　次

表1　入善町の遺跡
表2　じょうべのま東遺跡試掘調査トレンチ出土遺物一覧
表3　調査工程表
表4　遺物観察表

図　　版

図1　字割図
図2　遺跡周辺地図（明治43年）
図3　遺跡周辺地図（平成8年）
図4　地形と入善町の遺跡
図5　平成9年度じょうべのま東遺跡試掘トレンチ位置図
図6　製塩土器状遺物
図7　調査区グリッド割図
図8　調査区遺構配置図
図9　SB01遺構図
図10　古代・中世遺物図
図11　近世遺物図
図12　西連寺遺跡試掘位置図（H5･10年度）
図13　西連寺遺跡出土遺物図

写真図版

巻頭カラー　調査地全景・SD01とSB01
写真図版1　製塩土器状遺物
写真図版2　遺構写真(1)
写真図版3　遺構写真(2)
写真図版4　遺物写真
写真図版5　調査風景

第Ⅰ章　はじめに

1　調査に至る経緯

当地に事業計画が持ち上がったのは、平成６年のことである。国指定じょうべのま遺跡からわずか200ｍほどの場所であったため、事業が具体化した平成８年には、富山県埋蔵文化財センター（以下、県埋文センター）の協力を得て表面踏査を行うこととなった。その結果、多数の遺物（土師器・須恵器外）が発見され、事業地内に埋蔵文化財包蔵地（じょうべのま東遺跡）があることが判明した。平成９年に町は、当地を買収し、農地転用許可申請を提出した。その後、約55,000㎡の事業地内で試掘調査を行い、掘立柱建物跡等を発見する。

遺跡の取り扱いをめぐっては、町下水道課、町教育委員会、県埋文センター、県文化財課とで再さんにわたり協議が行われたが、現状保存は困難という結果に至り、平成13年に事業地内を記録保存することとなった。

2　遺跡の位置と環境

じょうべのま東遺跡は、黒部川右岸の扇状地末端部分にあり、遺跡の所在する入善町は富山県東部に位置し、東は朝日町、西は黒部市、南は宇奈月町に接し、北は日本海（富山湾）に面している。黒部川扇状地は、水源を鷲羽岳（わしばだけ）に発し、北アルプス後立山連邦と呼ばれる飛騨山脈を縦断して日本海に注ぐ黒部川が形成したもので、愛本を扇頂として典型的な扇状地を形成している。

富山県の歴史は、「水との闘いの歴史」といっても過言ではなく、東西90キロ余りの県土には、黒部川、片貝川、早月川、常願寺川、神通川、庄川、小矢部川の７大河川をはじめ数多くの河川がある。これらの多くは、急峻な山岳地帯を流れくだって短い距離で海へ注ぐことから我が国有数の急流河川となっており、古来、毎年のように洪水を繰り返してきた。黒部川も例外ではなく、松尾芭蕉が紀行文『奥の細道』で記したように、「四十八ヶ瀬」と称せられ、古黒部から生地までの扇状地を縦横無尽に幾筋にも分かれて日本海に注いでいた。そのため、黒部川扇状地は、上流河谷から運ばれた砂礫が乱流し堆積して層をなしている。

この遺跡のすぐ西側には、じょうべのま遺跡があり、遺跡から１㎞西の吉原沖からは、約1万年前の太古の自然林・海底林が発見されている。また、海岸線沿いには杉沢の沢スギとよばれる国指定天然記念物がある。昭和44年頃には約45haもあったが、その大部分は、圃場整備の際に伐採されてしまい、現在は約2.7haが残るのみである。

黒部川扇状地は地形的に見ると隆起扇状地部分と沖積扇状地部分に大別できるが、前者には、縄文時代中期から晩期にかけての遺跡が分布しており、本遺跡が所在する後者には古代以降の遺跡が点在している。本遺跡と関連する時代のものとしては、隣接するじょうべのま遺跡や西蓮寺遺跡等があげられるが、遺跡自体の数が比較的少ない。これは、先ほど述べたとおり、黒部川扇状地が、黒部川の氾濫源であり、絶えず流路を変化させていたことが原因と考えられる。

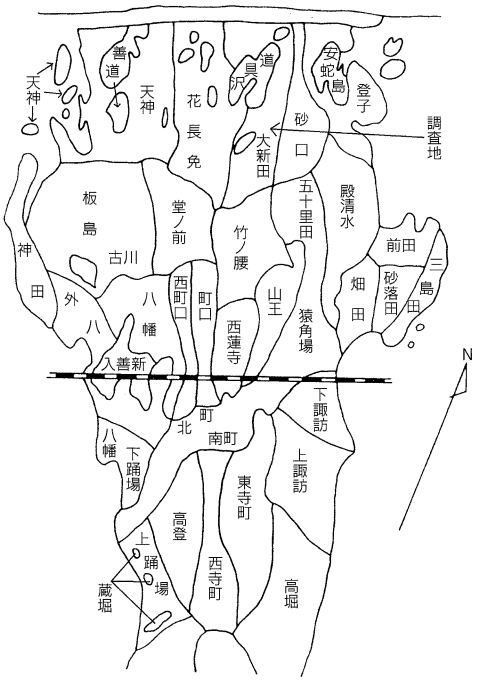


図1　字割図

図2　遺跡周辺地図（明治43年測量　1/50,000）

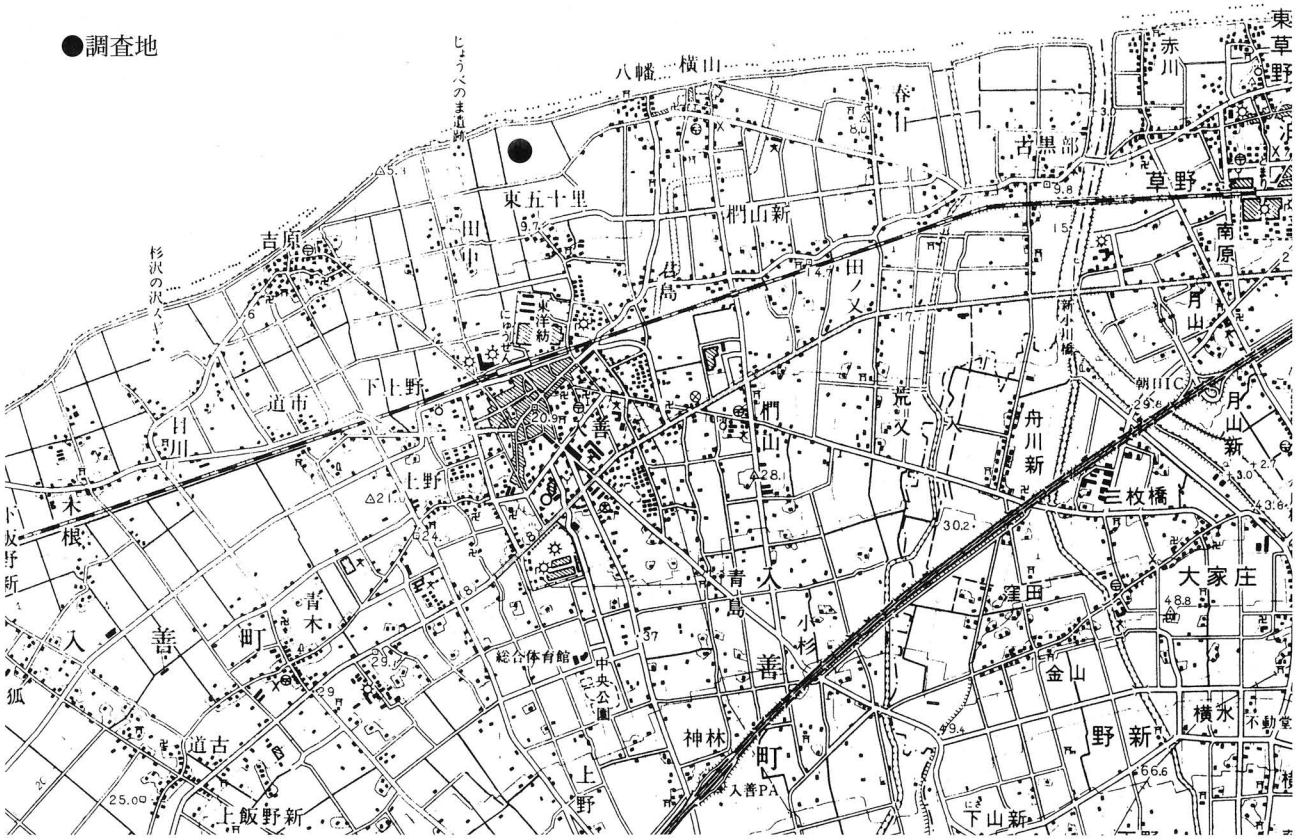


図3　遺跡周辺地図（平成8年測量　1/50,000）

「この地図は、国土地理院長の承認を得て、同院発行の5万分1地形図を複製したものである。（承認番号）平13北復、第313号」

表1　入善町の遺跡

No.	遺　跡　名	時　代
342001	じょうべのま遺跡	平安、鎌倉
342002	西蓮寺遺跡鎌倉	
342003	富士塚遺跡室町	
342004	中沢遺跡縄文中・後期	
342005	野中遺跡　縄文	
342006	今江遺跡縄文中期	
342007	下山峠遺跡縄文	
342008	西中遺跡　縄文	
342009	欠番	
342010	下山八幡社遺跡	鎌倉
342011	新屋島遺跡縄文後期	
342012	坪野遺跡縄文中期～晩期	
342013	舟見尾寄遺跡	縄文
342014	欠番	
342015	舟見狐平遺跡	縄文中期・戦国
342016	舟見城跡　室町	
342017	舟見小柴遺跡	室町
342018	HS-12-1遺跡近世	
342019	HS-11遺跡 中世	
342020	吉原杉沢遺跡	なし
342021	舟見遺跡鎌倉・室町	鎌倉、室町
342022	じょうべのま東遺跡	中世
342023	東五十里遺跡	中世
342024	HS-12-2遺跡近世	
342025	上野遺跡（旧：HS34遺跡）	不明

図4　地形と入善の遺跡

「この地図は、国土地理院長の承認を得て、同院発行の5万分1地形図を複製したものである。（承認番号）平13北復、第313号」

第Ⅱ章　調査の概要

1　調査の方法

グリッドの設定（図７）　グリッドは２ｍ方眼で、事業地内の全域をカバーできるように設定した。グリッドの基準は国家座標を用い、Ｘ105,650Ｙ29,810をＸ０Ｙ０として設定した。

発掘調査方法　調査内容は、a.表土除去、b.包含層掘削、c.遺構検出・発掘、d.遺構の記録写真撮影・実測図化、e.平面図測量である。

a.表土除去　試掘調査結果に基づき、調査員立ち会いのもと重機による表土除去を実施した。表土は、調査地の西・南・北側の３箇所に搬出し、重機によって台形状の山にした。

b.包含層掘削　人力により大体の部分をスコップで行ったが、地山が礫層のところは適宜つるはしを使用した。

c.遺構検出・発掘　人力により鋤簾やねじり鎌で遺構検出を行った。確認した遺構はスプレーペンキでマーキングを行い、縮尺1/200で概略図を作成した。遺構番号は、種類ごとに１番からつけた。遺構は、埋土の埋積状況を観察・記録するためのセクションベルトを残し、移植ゴテで発掘した。

d.遺構の記録写真撮影・実測図化　セクション図はすべて1/20で図化した。掘立柱建物をはじめ建物の柱穴や小穴は、空中写真測量後にすべて断ち割った。その際、平面では柱痕を確認できたものは柱痕部分で、それ以外のものは中心部分を通るように割った。写真はセクションについては、基本的に35㎜カメラで、重要な箇所についてはブローニー判カメラで撮影した。全景・ブロック写真は、ブローニー判カメラ・4×5インチ判カメラで撮影した。フィルムは、35㎜、ブローニー判はカラーと白黒で、4×5インチ判は、カラーとカラースライド、白黒を使用した。なお、ブロック・全景撮影に際しては、ローリングタワーを使用した。

e.平面図測量　平面図作成は、アジア航測株式会社に空中写真測量を委託した。撮影には、ラジオコントロールヘリコプターを使用し、ブローニー判で測量を行った。図化縮尺は1/20である。

整理作業　作業内容には、a.遺物整理作業、b.図面整理作業、c.写真整理作業がある。

a.遺物整理作業　調査と並行して水洗いを行い、調査終了後注記作業を行った。注記はポスターカラーを使用した。出土遺物が少なかったため、すべての遺物の図化を行った。

遺物の写真撮影は、ブローニー判カメラを使用し、朝日町教育委員会、㈶朝日町文化･体育振興公社の協力を得て行った。

b.図面整理作業　現場で製作した記録図面には、それぞれにタックシールを付け、図面の内容を明記した。

c.写真整理作業　現場で撮影した写真は、フィルムサイズ毎にネガアルバムに整理し、それぞれにタックシールを付け、写真の内容を明記した。遺物写真も同様である。

2　調査の経過

今回は、入善浄化センター建設工事にかかる水処理施設の建設予定地部分について調査を実施した。経過については平成８年度からの調査日誌を載せて説明とし、試掘調査の際に判明した事柄についてもあわせて掲載する。

確認調査（平成８年４月22日）

浄化センター建設事業に取り掛かるため、確認調査を実施。対象地は、国指定じょうべのま遺跡の東側に位置し、過去に調査を実施したＫ～Ｒ地区の東側約100ｍにあたる。須恵器・珠洲焼片等を採集。

試掘調査（平成９年11月26日～12月11日）

確認調査の際に遺物が採集された地点を中心に水田の長軸方向にトレンチを設定。対象面積55,000㎡中、調査面積は3,322㎡（72トレンチ）であった。この調査で、掘立柱建物等を検出。1,462.5㎡を保護措置を必要とする範囲に設定。建物跡にはブルーシートで養生した後、土をかける。

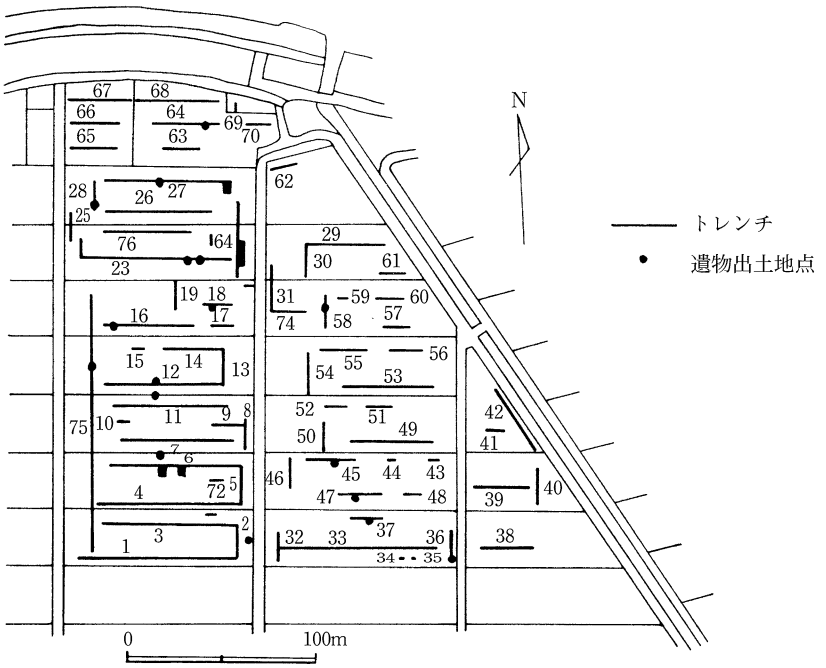
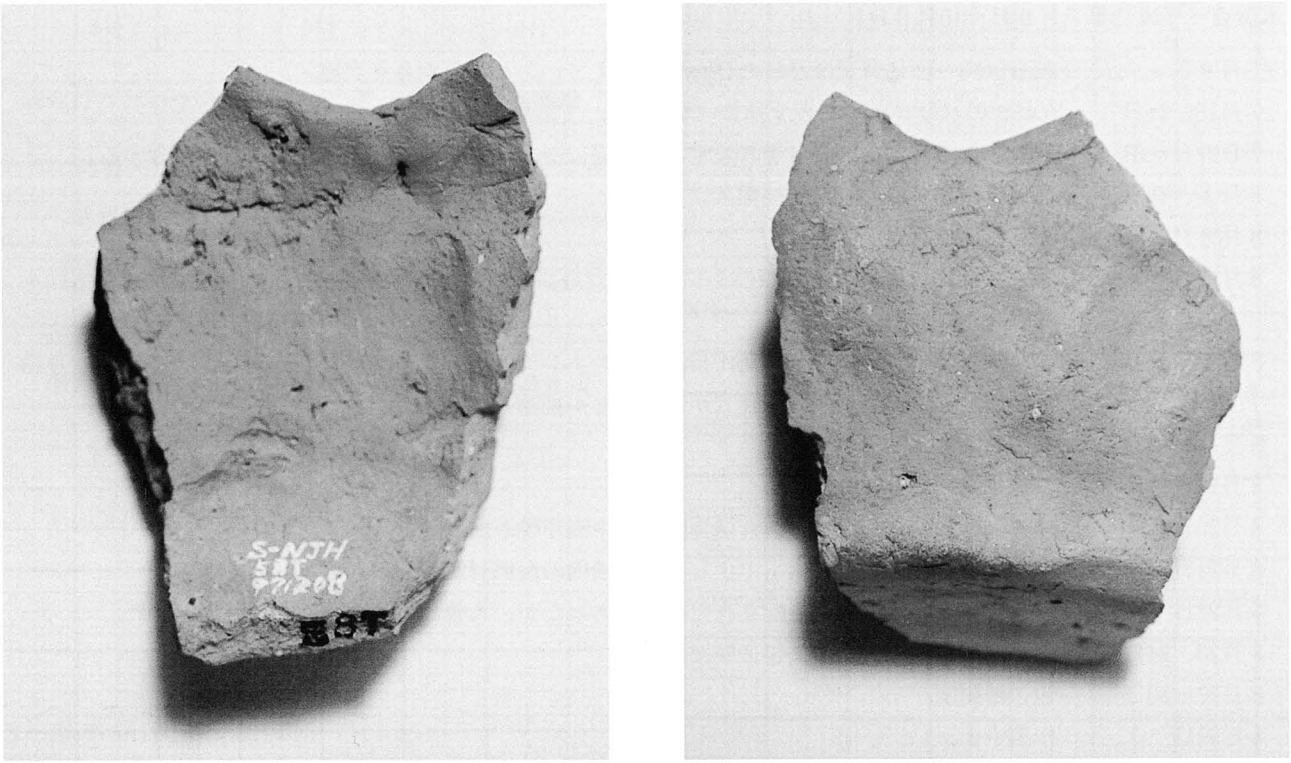


図5　平成9年度じょうべのま東遺跡試掘トレンチ位置図

トレンチNo.	出土遺物	備　　考	トレンチNo.	出土遺物	備　　考
2		トレンチ北で表面採集	27	中世土器	中間地点
6		7トレンチとの間で表面採集	28	中世土器	南
11		12トレンチとの間で表面採集	33	中世土器	西より61m
12	中世土器	西より４m	36	中世土器	南端
16	近世土器	中間地点	37	中世土器	中間地点
18	近世土器	中間地点	45	近世土器	中間地点
20	中世土器外	北側･H13年度調査	47	中世土器	西より３m
21		南側･H13年度調査	58	中世土器	北より３m
23	中世土器･自然木	北側･H13年度調査、自然木は保存展示	64	中世土器	西より20m
24		全体･H13年度調査	75	近世土器	北より10m

表2　じょうべのま東遺跡試掘調査トレンチ出土遺物一覧



写真図版1　製塩土器状遺物

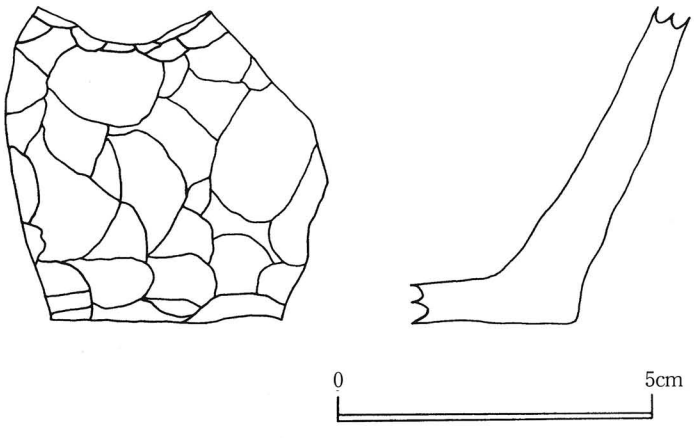


図6　製塩土器状遺物

製塩土器状遺物

本遺物は、製塩土器状遺物と現段階で推測している。

形状は、朝日町境関跡SK15から出土した製塩土器（斎藤隆・高橋真実1999『富山県朝日町境関跡発掘調査報告』P6）と似ており、輪積痕跡も明瞭である。焼成は、土師質土器（土師器）が非常によく焼かれていると見られ、硬さは須恵器・珠洲焼に似ている。

製塩土器は隣接するじょうべのま遺跡でも出土しているため、出土については、不自然ではないが、非常に硬く焼けているところが特異である。時期は境関跡例とじょうべのま東遺跡の主体時期とを合わせて考えると中世あたりとするのが妥当である。破片ということで、時期・性格が判然としない側面もあり、類例の増加を待って考察すべき遺物である。

本調査（平成13年７月９日～10月３日）

７月９日	調査区内一面に背丈ほどにのびた草が生えていたため草刈りを実施。
７月18、19日	0.45㎡のバックホウで表土除去（約20㎝）。土器類等遺物6点を採集。
７月27日～31日	業者による基本杭、ＢＭ等の設定。地山層に一部礫層があるため、杭の打設に苦労する。
８月１、２日	作業員休憩所の設置、器材搬入。
８月３日	事務所の設置
８月６日	調査開始式。試掘調査の際のトレンチ跡及び調査区内の包含層掘削を行う。1/200で概略図を作成。
８月７、８日	試掘調査の際、掘立柱建物跡が検出されたトレンチ跡の掘削が終了。ブルーシートをめくり遺構を確認。トレンチ外にも柱穴があることが推測される。
８月９日	降雨により作業中止。
８月10日～19日	お盆休み。
８月20日	建物跡トレンチを中心に包含層掘削。越中瀬戸焼が出土。
８月21日	台風11号が接近中。作業を中止し、調査地内の台風対策を行う。
８月22日	降雨により作業中止。心配された台風であったが、入善町内に大きな影響はなかった。
８月23、24日	建物跡トレンチを中心に包含層掘削。
８月27～30日	包含層掘削。
８月31日	作業中止。
９月４日	包含層掘削。入善浄化センターで通水式が行われる。
９月５日	調査地西側地区をバックホウ（0.45㎥）で新たに掘削。
９月６日	自然流路だと考えられていた遺跡内西側の地区は、ゆるやかな傾斜の土地であることが判明。表土の下から建物跡と思われる遺構を検出。
９月７日	包含層掘削。午後から降雨のため作業中止。
９月10日	台風15号接近中。台風対策を行い、10時に作業を中止する。
９月11日	台風のため作業中止。
９月12～14日	包含層掘削を行い、遺構を検出。
９月17日	平板で概略図の作成を行う。明日からの遺構掘削に備えてセクションの設定を行う。
９月18日	SB01、SD01、SA01、SP01～12の遺構掘削。SD01のセクションの写真撮影及び、断面図の作成を行う。アジア航測株式会社と打ち合わせを行う。航空測量を27日に行う予定で作業を進める。
９月19日	SA01、SP01～12の遺構掘削及び調査地内東側の清掃を行う。
９月20日	SK01～SK05の遺構掘削及び調査地内の清掃、白線引きを行う。海洋深層水課上田主事が調査にボランティアとして参加。
９月21日	降雨のため作業中止。
９月25日	遺跡内の清掃及びSK06～SK11の遺構掘削を行い、写真撮影・図面作成。 保健情報室飯作主事が調査にボランティアとして参加。
９月26日	足場を設置し（３箇所）、ブロック写真の撮影を行う。撮影準備として散水を行う。
９月27日	遺跡内の清掃及び白線引きを行い、その後、対空標識を設置する。午前11:30分からラジオコントロールヘリコプターによる航空測量開始。
９月28日	SB01～03の断ち割りを行い断面写真の撮影及び図面を作成する。
10月1日	降雨のため作業中止。
10月2日	雨の晴れ間を見て調査地内西及び北壁の断面図を作成。
10月3日	SP01～16の断ち割りを行い、断面写真の撮影及び図面の作成を行う。

4月	5月	6月
調査打ち合わせ	調査準備	調査準備
7月	8月	9月
草刈り 重機掘削	包含層掘削	遺構検出･包含層掘削 図面作成･写真撮影
10月	11月	12月
報告書作成	報告書作成	報告書作成
1月	2月	3月
報告書作成	原稿入稿･原稿校正	報告書発送

表3　調査工程表

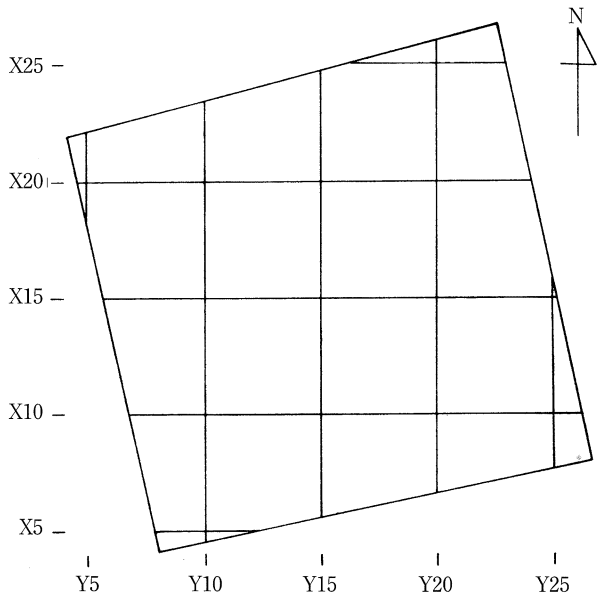


図7　調査区グリッド割図

3　基本層序

遺跡の層序は、昭和40年代に行われた圃場整備により、各箇所で多少のばらつきがある。地形は、東から西に緩やかに傾斜し、東端と西端では表土から地山まで約30㎝の高低差がある。

基本層序は、表土・現耕作土の１層（2.5Y4/2黄灰色シルト質土、20～30㎝）、近世から近現代の遺物包含層である２層（2.5Y4/1黄灰色砂質シルト土、5～10㎝）、古代及び中世の遺物包含層である３層（2.5Y3/1黒褐色砂質シルト土、5～10㎝）、地山（2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂質土または礫層）に大別される。１層及び２層上位は、試掘調査の結果から調査への影響が少ないものと判断し、重機により除去した。

4　遺構

遺構は、遺跡全体に広がっており、掘立柱建物3棟（SB01～SB03）、柵１条（SA01）、土坑11基（SK01～SK11）、小穴群16基（SP01～SP16）、流路1条（SD01）を検出した。

掘立柱建物　調査区の東側でSB01を検出した。SB02とSB03については、調査区南西端で規則的に並ぶ小穴を検出したためSBとした。調査を進めていくうちに、掘立柱建物とは関係のない小穴の可能性が高まったが、その後の間違いを避けるため、SBのまま扱った。

SB01　X15Y20区を中心に柱穴を検出した。２間（5.6ｍ）×３間（7.2ｍ）の東西棟の建物で、面積は40.32㎡の総柱建物である（約12坪）。北側は一面庇に外庇がついているとも考えられるが、断定はさけたい。

柱穴は円または楕円形で、深さは8～50㎝であった。柱穴からの出土遺物はないが、付近から古代及び中世の遺物が集中して見つかっているため、建物の時期もその頃と推測できる。

SB02　柱穴はほぼ円形で、深さは18～26㎝である。出土遺物はなく、時期の推定は困難である。

SB03　SB02同様、柱穴はほぼ円形で、深さは20～30㎝である。出土遺物はなく、時期の推定は困難である。

柵

SA01　調査区中央から、少し西にそれた所に位置しており、小穴５つが規則的に南北方向に並ぶ。付近に建物と思われるような遺構は見つからなかったが、ここでは、SAとして取り扱った。小穴同士の間隔は、130～160㎝で、深さは10～24㎝である。出土遺物はなく、時期の推定は困難である。

流路

SD01　調査区東側をSB01とほぼ平行して北流する旧河川であり、人為的な遺構ではない。幅は広いところで86㎝、深さは最深部で18㎝を測る。埋土は、調査区北端と南端は礫で、調査区中央は砂質土である。13世紀前半と思われる中世土師器の皿が１点出土している。切り合い関係から、SB01倒壊以後からSK03が出来るまで、中世から近世までの存続期間であったと推測される。

土坑　位置は、遺構の中心部分で表し、大きさはセクションポイント同士を結ぶ径×それに直交する最大径で、深さは最深部分で表した。

遺構番号	X	Y	径（cm）	深さ（cm）	備　　考
SK01	8	16	58×52	28	
SK02	10	24	270×190	46	
SK03	10	19	380×132	10	越中瀬戸、天目碗出土
SK04	10	15	334×248	10	
SK05	13	16	28×118	18	
SK06	21	14	560×328	24	
SK07	20	17	20×182	8	
SK08	18	19	24×116	4	
SK09	17	25	104×108	6	
SK10	18	17	172×128	20	
SK11	7	16	130×80	46	

小穴　位置は、遺構の中心部分で表し、大きさはセクションポイント同士を結ぶ径×それに直交する最大径で、深さは最深部分で表した。

遺構番号	X	Y	径（cm）	深さ（cm）	備　　考
SP01	19	23	62×50	14	
SP02	20	12	28×26	20	
SP03	20	11	32×26	18	
SP04	20	10	32×30	22	
SP05	17	10	30×28	20	
SP06	17	9	28×26	18	
SP07	15	13	29×26	26	
SP08	7	8	29×28	28	
SP09	7	10	24×22	16	
SP10	16	25	32×30	12	
SP11	17	15	28×26	18	
SP12	16	15	48×38	16	
SP13	17	17	42×41	30	
SP14	19	14	48×42	24	
SP15	21	15	74×56	16	
SP16	20	16	26×28	14	

5　遺物

本遺跡では、古代から近世の遺物が出土したが、点数は破片まで含めても48点と少なく、遺構からの出土は前述したとおり３点のみであった。

⑴　古代・中世

古代の遺物としては、須恵器が３点出土している。１は広口壺の口縁から頸部である。口縁端部は、横方向につまみだしており、内外面を回転撫でで調整している。

45、46は杯蓋で肩部に稜を持つ。

中世の遺物としては、珠洲焼（2～11）、中世土師器（12～18）が出土している。

２は壺の口縁部分で端部を外方へ短く挽きだし、断面は鈍い三角形を呈する。焼成は不良で灰白色である。

３～10は甕である。

３は底部破片で、内に自然釉薬が付着する。14～15世紀のものと推定される。

４は胴部近くの破片（胴上部の可能性もある）と推測される。外面には、文字か記号かは不明であるが、二本の平行する沈線（半裁竹管文状）文様が、ヘラ描きされている。沈線の幅は、0.4㎝で、一本は直線で、もう一本は途中で湾曲する。直線の長さは、約３㎝である。もう一方の曲線の方は、約２㎝までは判明しているが、両端が破片の外側に延びるようなので、全長は不明である。また、二本の線は、曲線のほぼ中央部で接している。文字と仮定した場合は、「大」・「九」の一部と推測できるが、小破片であることなどから、ここでは断定は避ける。二本線で刻印する例は、時期や遺物の種類は異なるが、県内では、上市町大岩日石寺裏山の大岩京ヶ峰経塚出土経筒外面銘文があげられる。（石田茂作1957「越中日石寺裏山経塚」『考古学雑誌第42巻第４号』P20）（４の考察については、石川県立歴史博物館館長吉岡康暢氏のご教示による）

５～10は胴部破片である。5－1は、外面は灰白色で格子叩き、内面は黄橙色で凹凸が目立ち、指頭と思われる圧痕が残る。5－2は、小片で5－1に類似する。６も5－1に類似するが、やや厚みがある。いずれも焼成不良である。

７、８は胴部でも底部近くと思われ、焼成は良く、内面は凹凸が目立ち、自然釉薬がまだらに付着する。

９も胴部破片で、外面に鉄分が付着しており、胎土に小石がまざる。

10は、調査区外から検出された胴部小片である。

11は鉢の口縁から胴部にかけてで、排出土中から検出されている。焼成は良く、胎土に小石がまざる。

12、13は小皿の口縁部で粗砂粒を多く含む。器壁はやや厚みがあり、色調は浅黄橙である。13世紀頃のものと推定される。

14は小皿の胴部分で、12、13とよく似た特徴を持つ。

15～17は、小皿の口縁部分で13世紀頃のものと思われる。胎土はきめが細かく器壁も薄く仕上げられている。17は内面にすすが付着しており、灯明皿として使用されていたことがわかる。色調は、浅黄色である。

18はSD01から出土した皿で13C前半のものと推定される。色調はにぶい黄橙色で口縁部を横撫でし、底部外面には指頭圧痕が残る。

⑵　近世以降

近世以降の遺物としては、越中瀬戸（19～36）、天目（37）、唐津（38～41、43）、伊万里（42）、瀬戸美濃（44）が出土している。

19～25は皿である。

19、22、23は若干丸みを持って立ち上がり、口縁部で端反り風になる内禿皿である。19、22はみこみと外面下半以外の部分に鉄釉が施されている。23は、みこみに十六弁菊の印花が押捺してある。

20は、SK03からほぼ完形に近い形で出土している。若干丸みを持って立ち上がり、胴部下半から口縁部まで直線

に延びる。削りだし高台で削りが深く断面が逆三角形になる。ほぼ全体に灰釉が施されている。

21は、丸みを持って立ち上がり、胴部中央で少し張り出し、口縁部がすぼまる。底部は削りだし高台である。

24は、口縁部小片で、灰釉が施されている。

25は、胴部小片である。

26、27は壺である。26は、胴部中央破片で、ほぼ直線的な立ち上がりである。27は肩部の破片で耳がつく。

28、36は碗である。28は、口縁部で鉄釉が施されている。36は、無釉であり、焼成不良で色調は灰褐色である。

29～35は、擂り鉢である。29、30は口縁の縁帯が短く折れるもので、胴部はろくろ撫でされている。

31、33、34は、胴部破片であり、いずれも色調は、褐色である。

32は、口縁の縁帯を外方につまみ出すもので、胴部はろくろ撫でされている。

35も口縁の縁帯を外方につまみ出すもので、注口が施されている。

37は、天目碗の底部で削り出しの高台が施されている、

38～41、43は唐津である。38、39、41、43は皿である。38は、胴部中央から底部にかけてで、削り出し高台である。17世紀後半のものと推定される。

39は口縁部で、17世紀後半のものと推定される。

41は底部で、削り出し高台である。

43は皿の胴部である。

40－1、40－2は小片のため器種は不明である。

42は伊万里の碗であり、17～18世紀のものと推定される。色調は灰色である。

44は、瀬戸美濃の皿であり、16世紀後半のものと推定される。みこみ部分に重ね焼きの跡があり、全体に鉄釉が施されている。底部は削り出し高台である。

表4　遺物観察表

番号	X	Y	遺構番号又は出土層位	年代	種　類	器種	備　　考
1	23	15	3層	古代	須恵器	壺	口縁～胴部、灰色
2	11	15	3層直上	中世	珠洲焼	壺	口縁、灰白色
3	10	19	2層	中世	珠洲焼	甕	底部、14～15世紀
4	11	15	2層	中世	珠洲焼	甕	胴部、焼成不良、篦施紋
5-1	11	15	3層直上	中世	珠洲焼	甕	胴部、外：灰色、内：黄灰色
5-2	11	15	3層直上	中世	珠洲焼	甕	胴部、外：灰色、内：黄灰色
6	12	15	2層	中世	珠洲焼	甕	胴部
7	13	16	2層	中世	珠洲焼	甕	胴部、灰色、内：自然釉薬
8	15	10	2層	中世	珠洲焼	甕	胴部、灰色、内：自然釉薬
9	19	15	2層	中世	珠洲焼	甕	胴部、灰色
10			調査地外	中世	珠洲焼	甕	胴部、灰色
11			排出土	中世	珠洲焼	鉢	口縁～胴部、灰色
12	10	19	2層	中世	中世土師器	小皿	口縁、13世紀
13	11	15	3層直上	中世	中世土師器	小皿	口縁
14	17	6	1層	中世	中世土師器	小皿	胴部、13世紀頃
15	18	22	2層	中世	中世土師器	小皿	口縁～底部、13世紀頃
16	13	24	1層	中世	中世土師器	小皿	口縁、13世紀頃
17	18	15	2層	中世	中世土師器	灯明皿	すす付着
18	9	20	SD01、3層	中世	中世土師器	皿	13世紀前半
19	10	19	2層	近世	越中瀬戸	小皿	
20	10	19	SK03、2層	近世	越中瀬戸	小皿	
21	18	14	2層	近世	越中瀬戸	小皿	
22	18	15	2層	近世	越中瀬戸	小皿	
23	18	16	3層直上	近世	越中瀬戸	小皿	
24	13	16	2層	近世	越中瀬戸	皿	口縁
25	21	9	2層	近世	越中瀬戸	皿	
26	7	11	3層直上	近世	越中瀬戸	壺	
27	10	10	1層	近世	越中瀬戸	壺	表土剥ぎ
28	23	23	2層	近世	越中瀬戸	碗	口縁
29	10	20	2層	近世	越中瀬戸	擂り鉢	口縁、17世紀後半
30	10	20	2層	近世	越中瀬戸	擂り鉢	口縁
31	14	13	2層	近世	越中瀬戸	擂り鉢	17世紀後半
32	18	15	2層	近世	越中瀬戸	擂り鉢	17世紀後半
33	18	15	2層	近世	越中瀬戸	擂り鉢	口縁
34	18	15	2層	近世	越中瀬戸	擂り鉢	
35	18	15	2層	近世	越中瀬戸	擂り鉢	

36	8	5	1層	近世	越中瀬戸	碗	表土剥ぎ
37	9	20	SK03、2層	近世	天目	碗	底部
38	10	19	2層	近世	唐津	皿	胴～底部、内：灰釉、17世紀後半
39	11	8	2層	近世	唐津	皿	口縁、17世紀後半
40-1	10	19	2層	近世	唐津	不明	胴部
40-2	10	19	2層	近世	唐津	不明	胴部
41	24	23	2層	近世	唐津	皿	
42	22	11	2層	近世	伊万里	碗	17～18世紀
43	8	5	1層	近世	唐津	皿	表土剥ぎ
44	10	20	2層	近世	瀬戸美濃	皿	16世紀後半
45	19	23	2層	古代	須恵器	杯蓋	
46	24	15	2層	古代	須恵器	杯蓋	

6　まとめ

今回調査した結果、検出された遺構や出土した遺物からわかった当遺跡の性格について要約し、まとめとしたい。

当遺跡は、黒部川によって形成された扇状地の末端部分に位置する。

遺構は調査地の東側に掘立柱建物、流路があり、西側に柵がある。小穴及び土坑は、遺跡の各所に広がっている。

掘立柱建物は、砂地に建てられており、礫層をさけている。礫層は、当地の遺構が出来る以前の自然流路跡と考えられることから、微高地上に建物が建てられていたことがわかる。

掘立柱建物は２間×３間の東西棟の建物である。

遺構からの遺物出土は少なかったが、SD01から中世土師器の皿1点が、SK03から近世越中瀬戸の小皿が１点、同じく近世天目碗が1点出土している。

遺物は全部で48点出土した。その内訳は、古代では須恵器3点。中世では珠洲焼11点、中世土師器７点。近世以降では、越中瀬戸18点、天目１点、唐津５点、伊万里１点、瀬戸美濃１点である。

遺物から見ると、中世以降が遺跡の主体時期と言える。

遺跡で検出した遺構と遺物内容は上記のとおりで、特異な点は認められない。このことから、当遺跡は、古代の足跡を残した、中世から近世にかけての一般集落跡と推測される

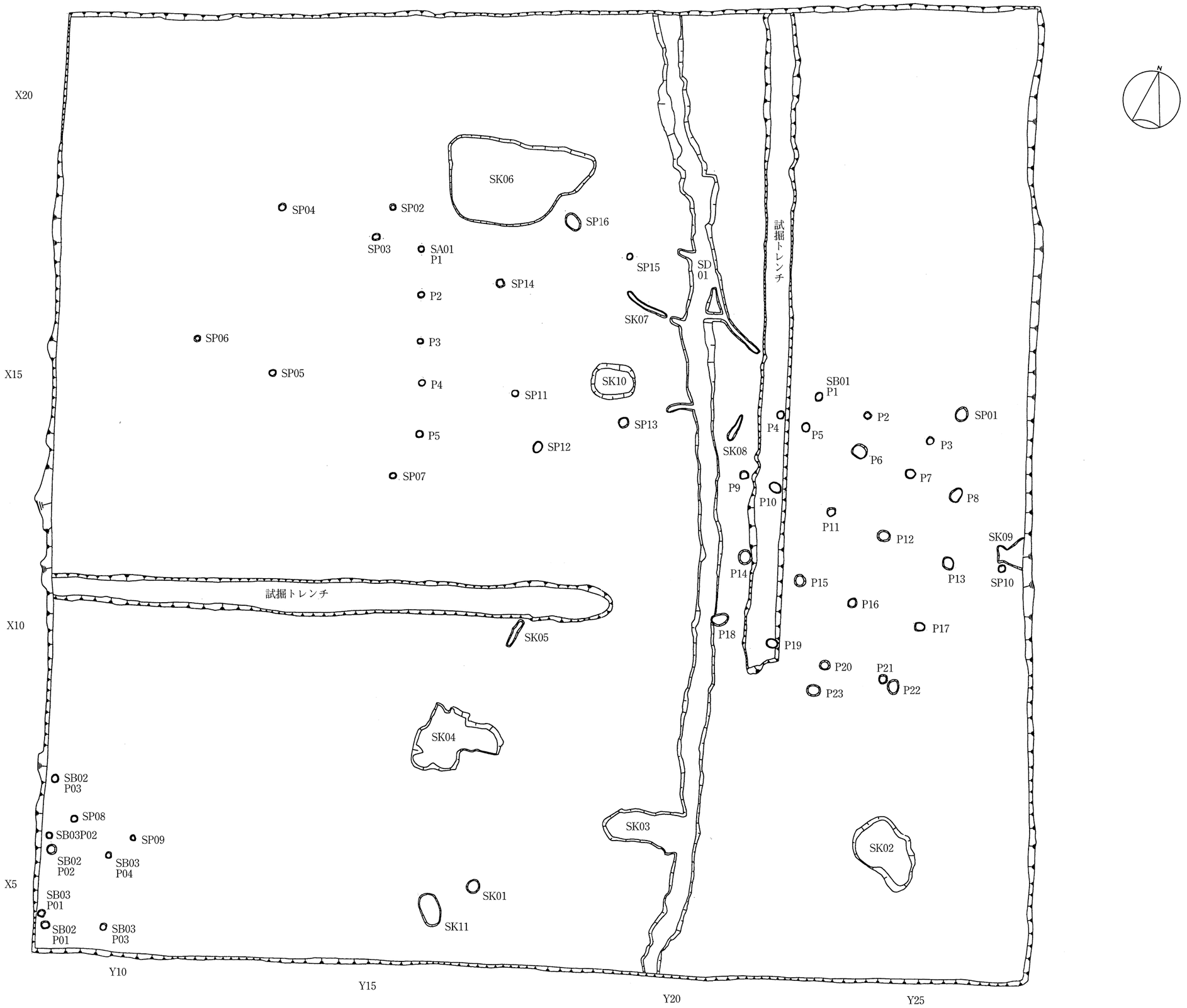

X20
X15
X10
X5
Y10
Y15
Y20
Y25
SK06
SP04
SP02
SP16
SP03
SA01
P1
SP15
SD
01
試掘トレンチ
SP14
P2
SK07
SP06
P3
SP05
P4
SK10
SP11
SB01
P1
P2
SP01
SP13
P4
P5
P3
P5
SP12
SK08
P6
SP07
P7
P9
P10
P8
P11
P12
SK09
P14
P13
SP10
P15
試掘トレンチ
P16
SK05
P18
P17
P19
P20
P21
P23
P22
SK04
SB02
P03
SP08
SK03
SB03P02
SP09
SK02
SB02
P02
SB03
P04
SK01
SB03
P01
SK11
SB02
P01
SB03
P03

図8　調査区遺構配置図

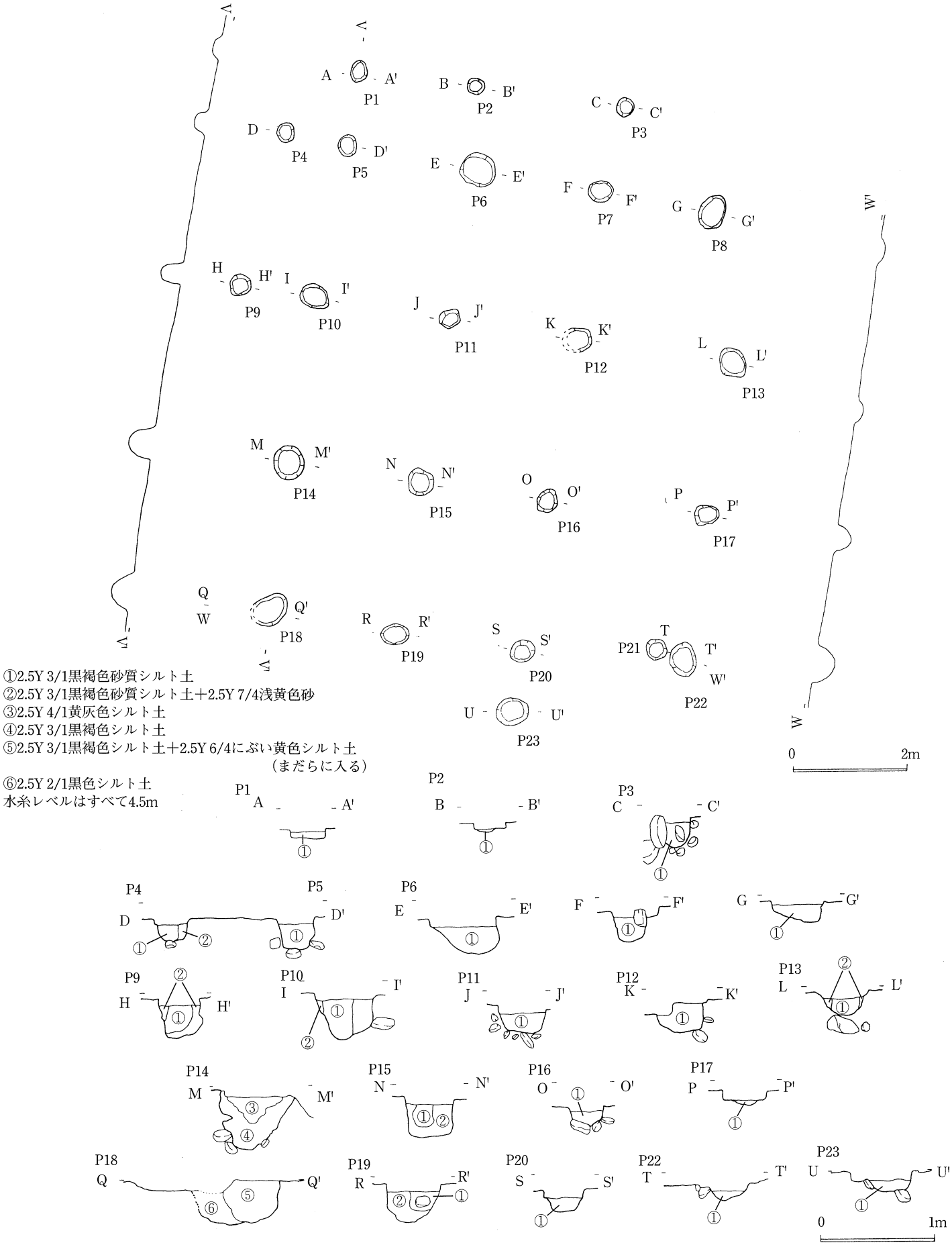
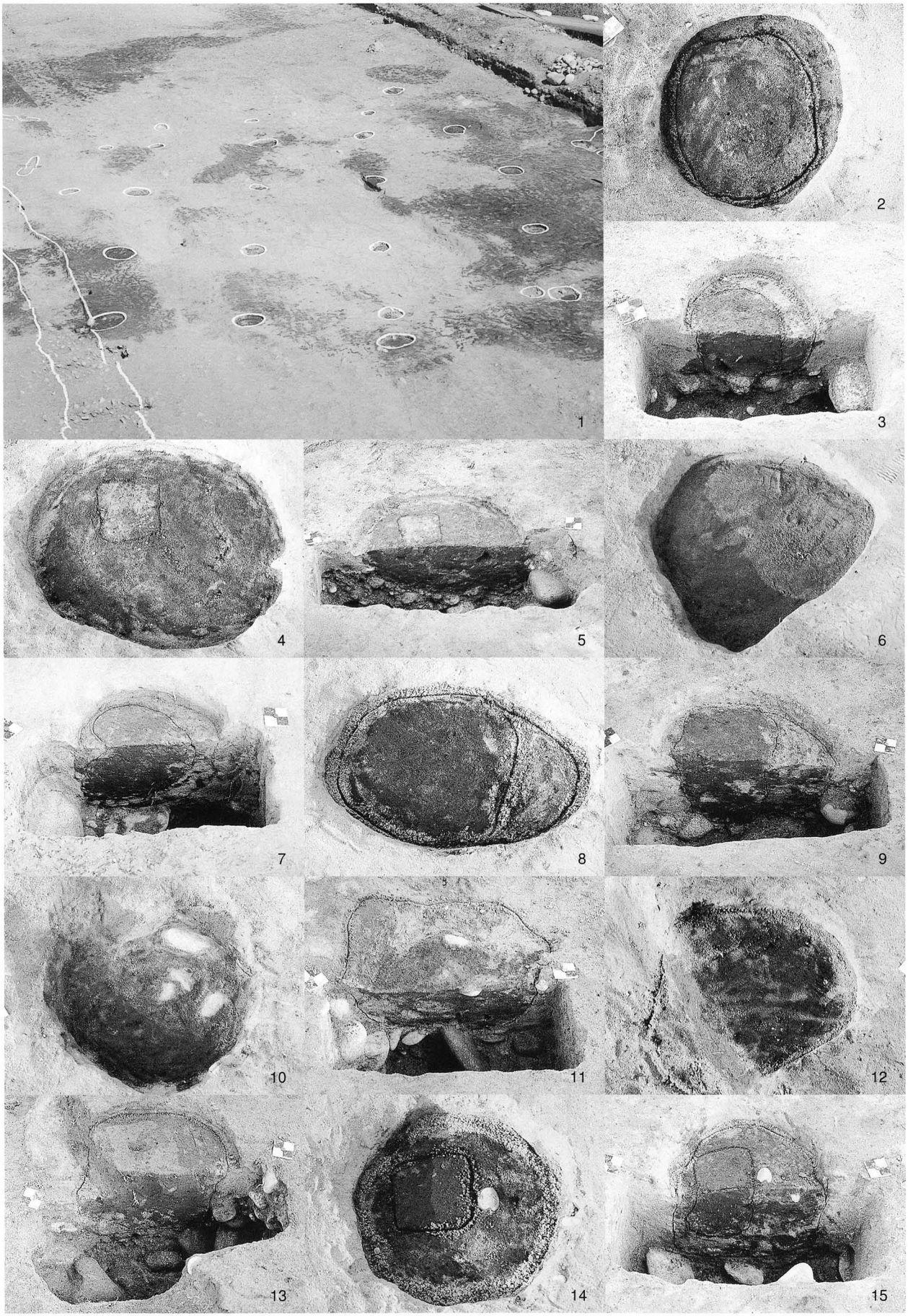
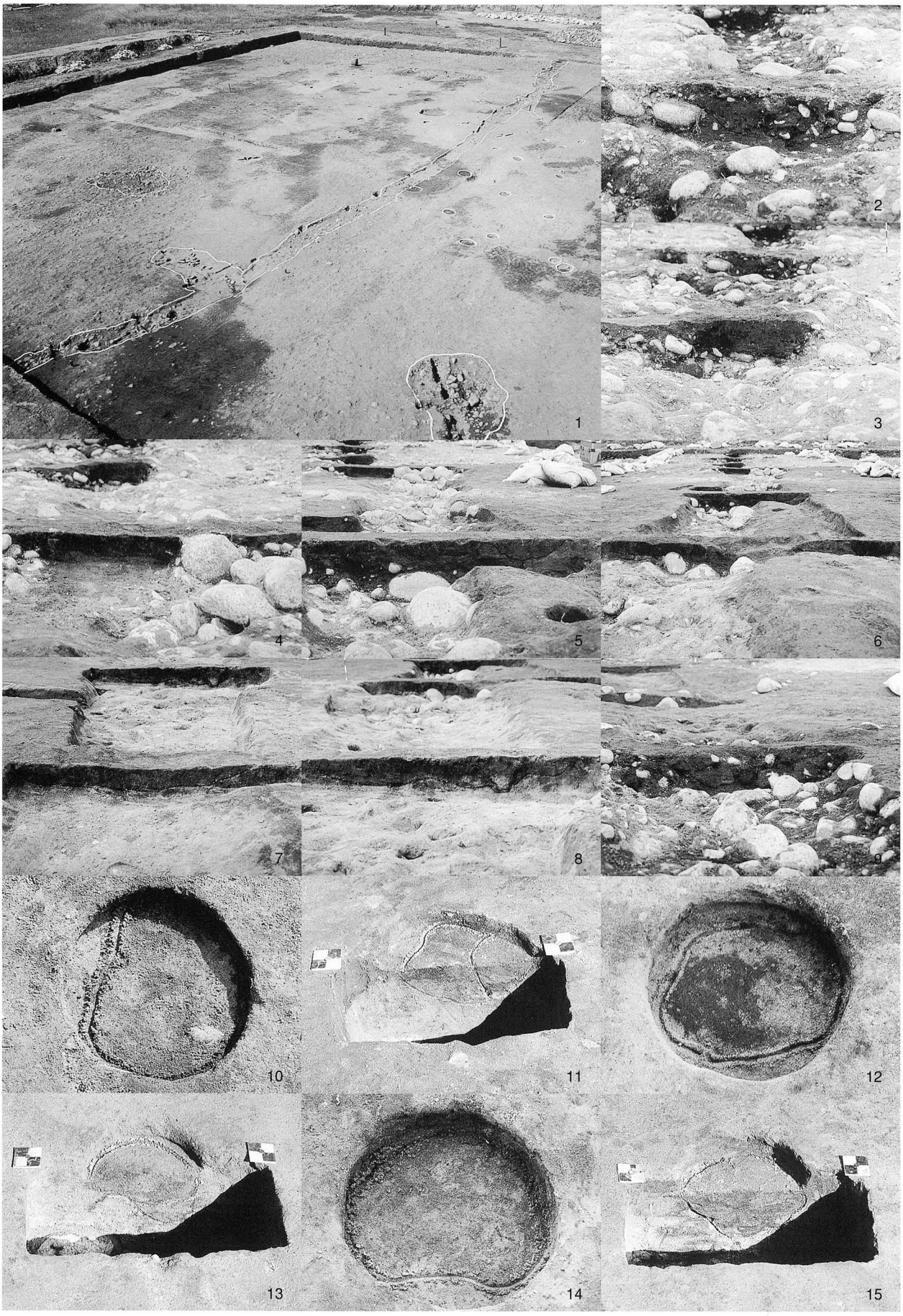

V
V'
A
A'
P1
B
B'
P2
C
C'
P3
D
D'
P4
P5
E
E'
P6
F
F'
P7
G
G'
P8
W
W'
H
H'
P9
I
I'
P10
J
J'
P11
K
K'
P12
L
L'
P13
M
M'
P14
N
N'
P15
O
O'
P16
P
P'
P17
Q
Q'
P18
R
R'
P19
S
S'
P20
T
T'
P21
W'
P22
U
U'
P23
0
2m
①2.5Y 3/1黒褐色砂質シルト土
②2.5Y 3/1黒褐色砂質シルト土＋2.5Y 7/4浅黄色砂
③2.5Y 4/1黄灰色シルト土
④2.5Y 3/1黒褐色シルト土
⑤2.5Y 3/1黒褐色シルト土＋2.5Y 6/4にぶい黄色シルト土
（まだらに入る）
⑥2.5Y 2/1黒色シルト土
水糸レベルはすべて4.5m
0
1m

図9　SB01　遺構図



写真図版2　遺構写真(1)

1　SB01南から　2､3　SB01P4　4､5　SB01P6　6､7　SB01P9　8､9　SB01P10　10､11　SB01P11　12､13　SB01P12　14､15　SB01P15



写真図版3　遺構写真(2)

1　SD01　南東から　　2～9　SD01　A～G、Mセクション　　10、11　SA01P2　　12、13　SA01P4　　14、15　SA01P5

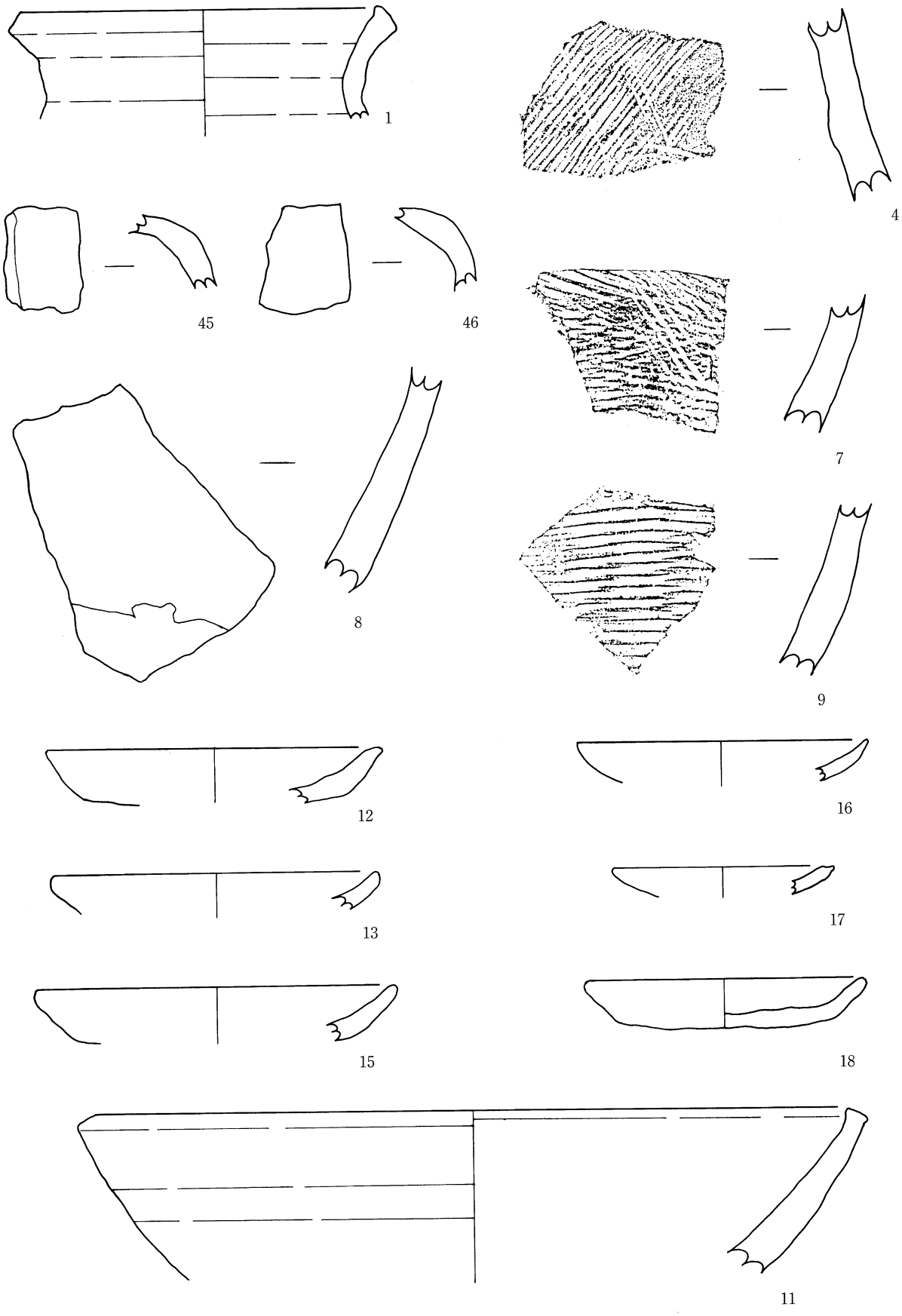


図10　古代・中世遺物図

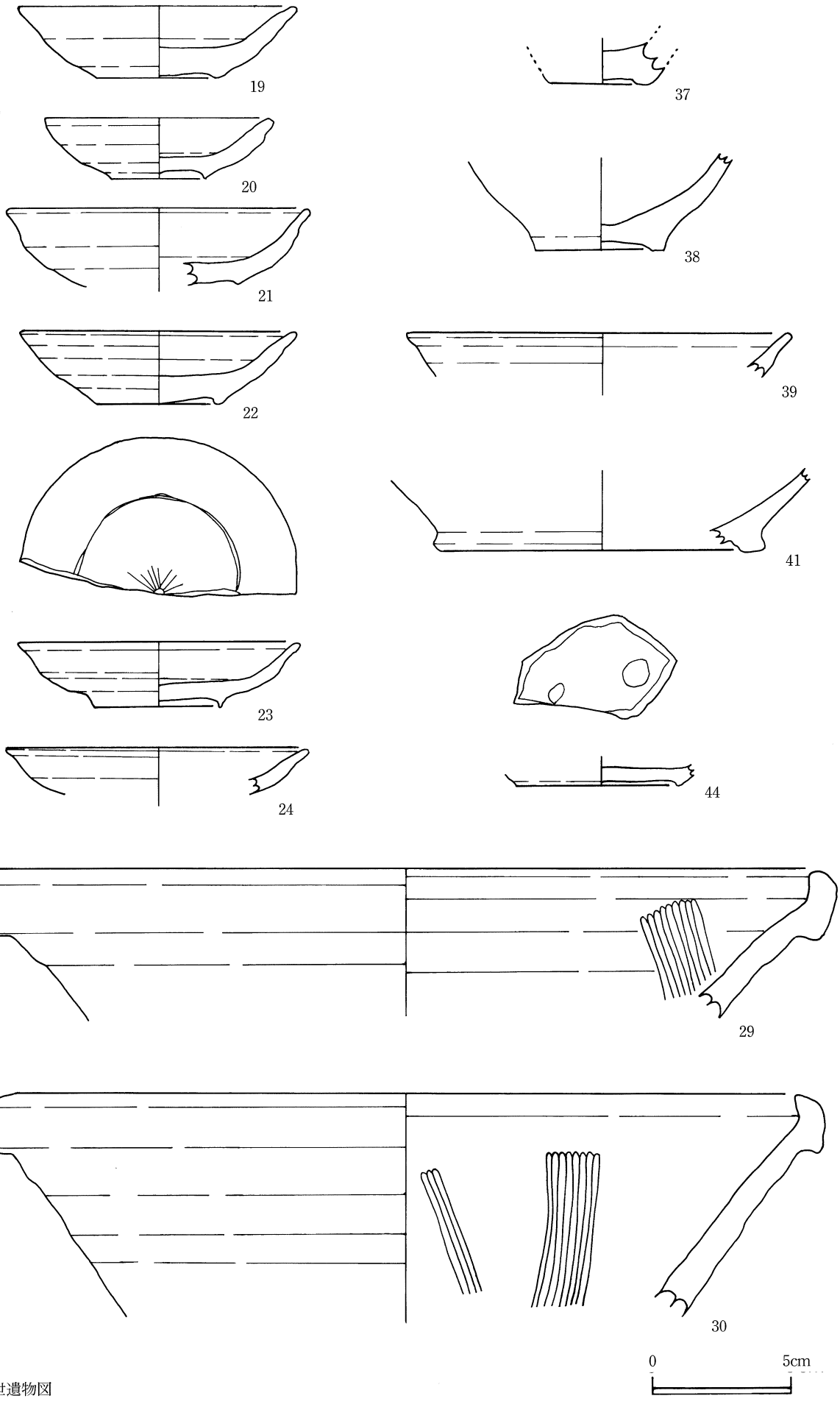
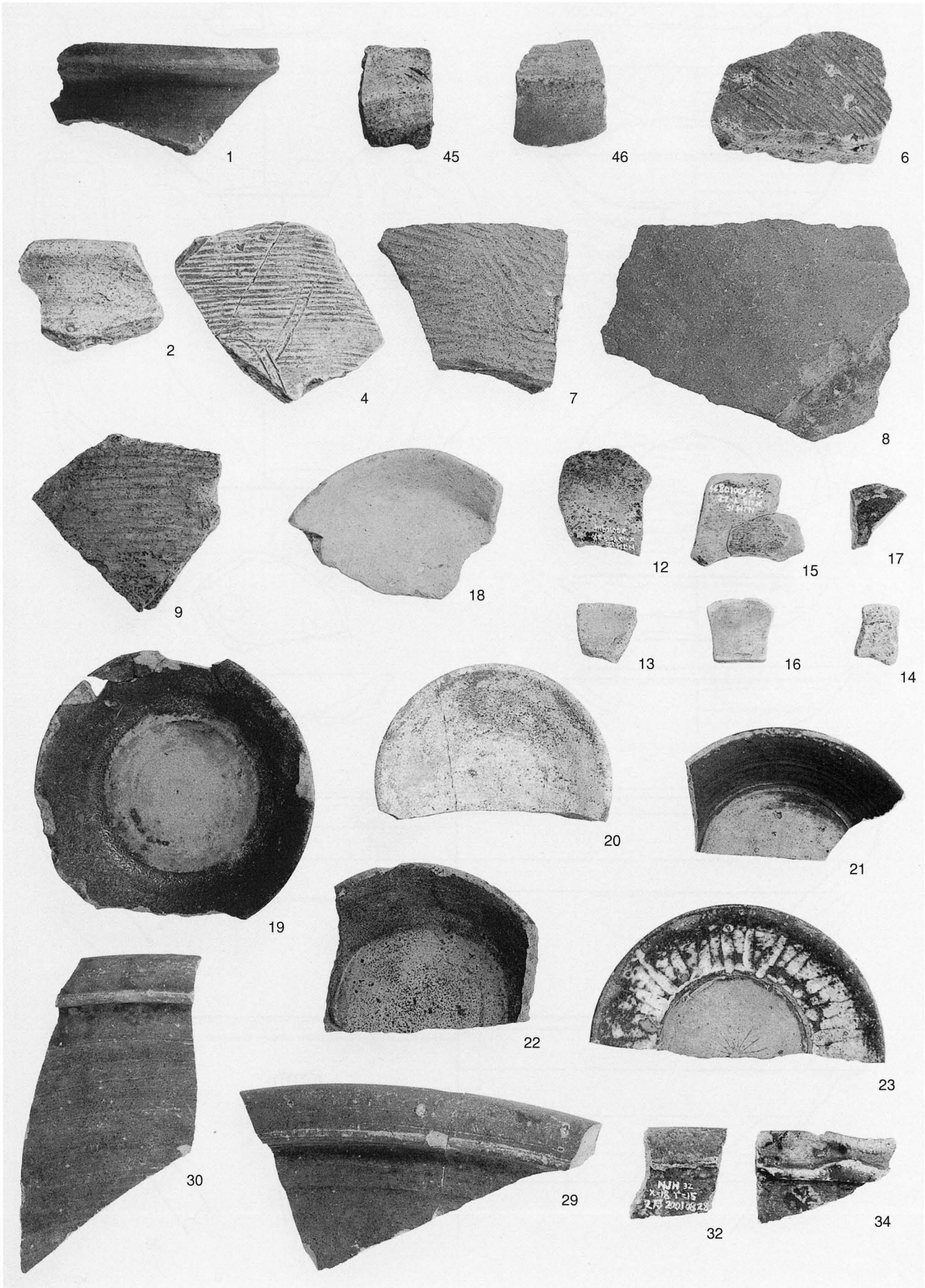


図11　近世遺物図



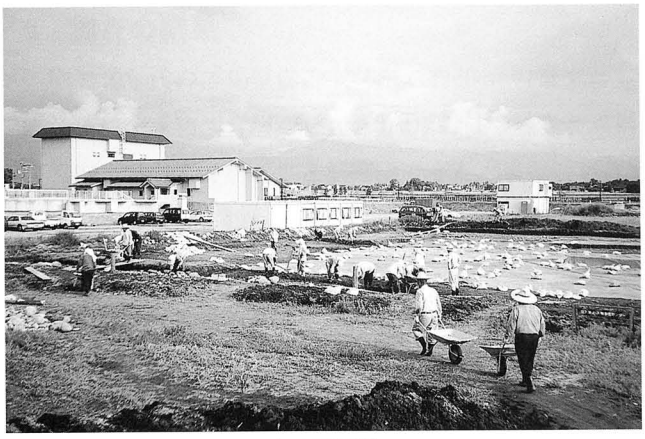
写真図版4　遺物写真（S＝1/2）

重機掘削

杭打ち

調査事前説明

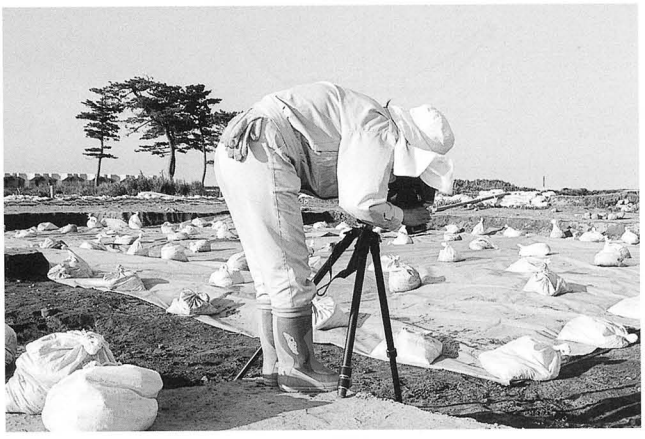
包含層掘削



包含層掘削

測量

測量



出土物撮影

写真図版5　調査風景

参考文献

珠洲市立珠洲焼資料館　平成元年　『珠洲の名陶』

富山県農地林務部ほ場整備課　昭和62年　『土地分類基本調査　三日市・泊（富山県分）』

入善町　昭和42年　『入善町誌』

入善町　平成２年　『入善町史　通史編』

吉岡康暢　平成６年　『中世須恵器の研究』

第Ⅲ章　西蓮寺遺跡試掘調査報告

1　西蓮寺遺跡の位置と歴史的環境

西蓮寺遺跡は、入善町のほぼ中心部、入善駅の北側に位置する。国指定史跡「じょうべのま遺跡」からは、直線にして約1.5㎞の距離を測る。地形的には黒部川扇状地の扇端部にあたり、標高は約15ｍである。

遺跡名となった「西蓮寺」は、水橋将監が鎌倉幕府に追われた際に身を寄せた寺院とされ（『入善町誌』1967）、その弟は、稲川将監を名乗り地頭的な役割を担い館を構え、その後、代々主は将監と名乗り栄えていたが、上杉謙信によって付近の集落共々寺院・館も焼き払われ没落したとする。『入善町史資料編』（1986･p.87）によれば、この付近では、珠洲・五輪塔などの遺物が確認されているものの、考古学的な調査は今日にいたるまで為されておらず、詳細は不明であった。

2　調査の経緯と方法

平成10年３月３日に実施した試掘調査は、調査地点が遺跡の北西にあたり、遺跡の大部分を占める民間工場用地敷地に道路を隔てて接する状況にある。既に付近は昭和40年代にほ場整備が終了しており、水田形状も現在の３反田に改編を受けた状況であった。

この調査の原因は、民間企業による宅地造成・資材置き場の造成が主な原因であった。調査対象面積は約1,800㎡で、調査時における現状は、水田と畑であった。調査方法は、重機掘削によるトレンチ調査を中心に行い、地表下約1ｍにある遺構を確認した。

3　調査の結果

昭和40年代のほ場整備の痕跡が、約60cmの盛土として確認でき、下位の遺物包含層･遺構確認面での柱痕跡など遺構がきわめて良好に遺存していることが確認できた。また、包含層は、1･3トレンチで良好に残り、墨書土器などの出土遺物も出土した。

調査区の西側においては、流路などの痕跡によって遺構確認面まですでに削平される状況にあるが、東側部分においてはきわめて良好に遺構が確認できた。遺物で、器形復元可能であったものは古代の土師器椀１点である。底部に「西」と看取できる墨書が残り、底部径は、５㎝を測るが、器高は不明である。極めて良好な焼成である。

4　まとめ

出土した墨書土器は、じょうべのま遺跡等との関係を考慮しながら今後の資料の増加を待ちたい。また中世の遺構に関するものは確認できなかったが、今後、付近の調査の際には、寺院・館などの遺構を想定し、調査する必要がある。

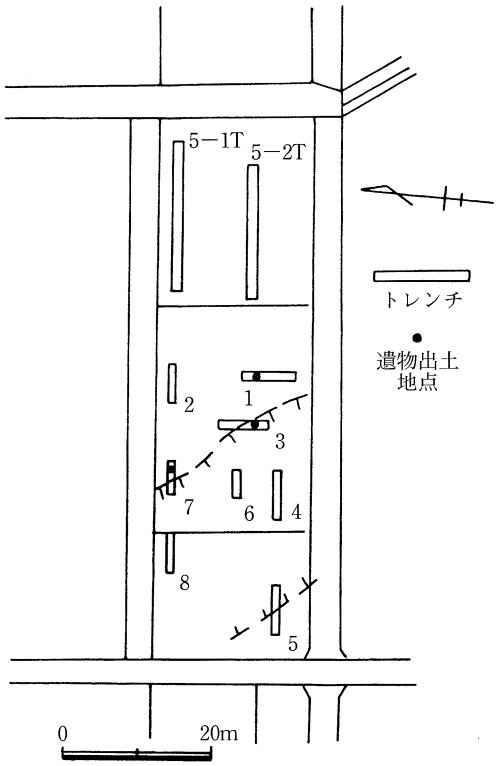


図12　西蓮寺遺跡試掘位置図（H5・10年度）

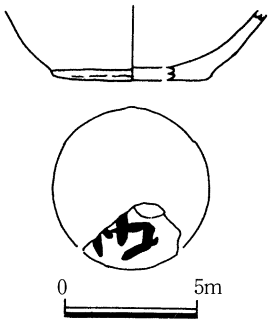


図13　西蓮寺遺跡出土遺物図

報告書抄録

ふりがな	とやまけんにゅうぜんまちにゅうぜんじょうかせんたーようちないじょうべのまひがしいせきはっくつちょうさほうこく
書　　名	富山県入善町入善浄化センター用地内じょうべのま東遺跡発掘調査報告
編著者名	杉澤禎子
編集機関	入善町教育委員会
所在地	〒939-0693　富山県下新川郡入善町入膳3255　　TEL0765（72）1100
発行年月日	2002年3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
じょうべのま東	富山県下新川郡入善町東五十里	163422	30422	39°48′59″	131°32′20″	20010806 ～ 20011003	1,462.5㎡	入善町公共下水道事業入善浄化センター建設工事に係る調査

所収遺跡	種類	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
じょうべのま東	集落跡	中世 近世	掘立柱建物、柵列、土坑、自然流路	中世土師器、珠洲、越中瀬戸	特になし

富山県入善町
入善浄化センター用地内じょうべのま東遺跡発掘調査報告
発行日　平成14年3月
発　行　入善町教育委員会
〒939-0693　富山県下新川郡入善町入膳3255
TEL　0765(72)1100
http://www.town.nyuzen.toyama.jp
編　集　入善町教育委員会
印　刷　池原印刷所